広島市立広島市民病院広報紙

かがやき

Hiroshima City Hospital public relations magazine
Kagayaki

No.40
令和４年10月

編集・発行
広島市立広島市民病院
〒730-8518 広島市中区基町7番33号
TEL.082-221-2291 FAX.082-223-5514
HP http://www.city-hosp.naka.hiroshima.jp/

患者さんがかがやいて、広島市民病院がかがやくように！

広島市立広島市民病院
副院長（整形外科）
出家　正隆

「先生、病院広報紙に寄稿お願いします。」

新しい職場に勤務すると、よくこのような電話がかかってきます。

2022年4月から本院に副院長として勤務しています出家です。よろしくお願いします。

先の電話に、「いや、もうすでに赴任のあいさつは書いたよ。」と不機嫌に返事すると、とにかく先生の部屋に行きますとのことでした。待っていると杖をついた女性が訪ねてきました。「先生、『かがやき』という広島市民病院の広報紙で年１回発行なので、先生にはまだ寄稿してもらっていませんので。」とのことで、しぶしぶ承諾しました。

「出家先生、ところで、私、Ｓです。先生に膝を手術してもらったＳです。」と言われるではないですか。言われて、アッと記憶が蘇ってきました。10数年前、彼女は事故で両下肢に大きな怪我をして、特に片方の脚は厳しく、反対の脚を何とか治さなければと歩くことも厳しい状況でした。彼女と何回も相談して前例のない新たな方法で手術したことが思い出されました。術後、私が愛知医科大学に異動したので、経過をよく知らなったのですが、「先生のおかげで社会復帰できて、今ここで働いているんですよ」と。医者として、術者として、これほど嬉しいことはない。もちろん復帰には彼女自身の多大な努力があったに違いありません。私には彼女と彼女の脚が輝いて見え、「早く言ってくれれば、速攻で快諾したよ」と先ほどの不機嫌さは一気に解消されました。

医師として30年以上勤務してきますと、いいことばかりではなく、もちろんいわれもないことあります。ただ、医療従事者は、それぞれの職を目指した時、患者さんの助けになりたいと思って、その職に就き、現場では目の前の患者さんを治すことに専念しています。2020年からのコロナによるパンデミックでは、広島市民病院も広島県、広島市の基幹病院として、医師や看護師、事務職員など全職員で対応し頑張っております。With Coronaの時代、医療人として志すことは不変ですが、社会も人も患者さんも、それぞれいままで抱いていた価値観が変化しつつあります。広島市民病院も、広島市の中核病院として、時代とともに臨機応変な施策を求められていることを実感しています。広島市民病院は、1952年に創立し、2014年に広島市から独立行政法人広島市立病院機構に運営移行されました。独立化により、即応性・柔軟性を持った対策ができそうですが、なかなかお役所体質が抜けていないと感じられる患者さん・市民の皆様も多いと思います。私自身もそう感じています。愛知医科大学で６年８か月勤務する以前は、広島大学におりましたので、広島市民病院のことはもちろん知っておりました。街中のきれいな大きな病院で、最新の医療を行っている、多くの市民の皆さんが、病気になったら癌になったら、広島市民病院に行こうと思われている信頼されている病院であると。その信頼は、これまでの先達の努力の積み重ねで得られたものであることが、赴任後、より明確に感じられました。

新時代に対応して、これから広島市民病院が、より発展するためには、そのためにどうするか、秀病院長先生以下、目標を一つにして、広島一、日本一、世界一信頼される病院になるには、どうすべきか。新しいことは、予算がない、前例がないからできないというお役所仕事ではない、柔軟かつ迅速な対応をできるような病院にする。患者さんが自分の家族ならどうするかを考えて動けば、自ずと答えは導かれるような気がします。Ｓさんを治療する時、彼女が、妹や娘だったらどうしようかと考えていたような気がします。広島市民病院が益々信頼される病院になるように努めていきたいと思っています。何卒宜しくお願い致します。

副院長就任のご挨拶

広島市民病院 副院長
松川啓義

日頃より広島市民病院に多大なる御高配をいただき誠にありがとうございます。

このたび４月に副院長を拝命いたしました松川啓義（ひろよし）と申します。私は、1990年に岡山大学を卒業し、同大の消化器外科学教室に入局し外科医としての経験を積んでまいりました。広島市民病院では現在まで延べ15年間、消化器外科、特に肝胆膵外科を専門領域として診療しております。また当院では５年間手術室の主任部長、１年間外科の主任部長を務めさせていただきました。

近年、手術治療の中で特に低侵襲手術の発展は目覚ましいものがあります。多くの外科領域で胸腔鏡、腹腔鏡などの内視鏡を用いた鏡視下手術が進歩しています。当院でも手術を行うほとんどの診療科で低侵襲手術を積極的に行っており、患者さんに少しでも負担の少なくやさしい手術治療が提供できるよう日々取り組んでいます。私の専門とする肝胆膵領域の外科治療でも、以前は当然のように開腹手術で行っていた手術難度の高い肝切除術や膵切除術も腹腔鏡で行うことも多くなってきています。

更にこの10年のうちにダヴィンチという手術支援ロボットを用いた、ロボット支援手術が保険診療で行われるようになりました。当院でも泌尿器科（前立腺、腎、膀胱）に続き呼吸器外科（肺、縦隔）、外科（食道、胃、直腸、膵臓）、婦人科（子宮）でロボット支援手術を保険診療で行っております。現在当院では年間300件を超えるロボット支援手術が行われており、現有の１台のロボットではフル稼働の状況です。今年度、保険収載されたロボット支援手術の対象臓器・疾患も結腸（大腸）や肝臓などを含めてさらに拡大しており、ロボット支援手術が最適と考えられる患者さんに提供できるよう、来年度には手術支援ロボットが２台体制となる予定です。

当院での低侵襲手術の取り組みとして、もう１つハイブリッド手術が挙げられます。手術室に最新鋭の血管撮影装置を設置し、手術のみでは到達困難な部位への血管内カテーテル治療が可能となることや、カテーテル治療のみでは治療できない病変に対しても手術を同時に行うことができるようになります。心臓血管外科領域の大動脈瘤に対するステントグラフト内挿術や大動脈弁狭窄症に対する経カテーテル大動脈弁留置術（TAVI）は中四国でも有数の症例数です。侵襲の大きな開腹手術や開胸手術が適応困難な重症あるいは高齢の患者さんに低侵襲手術が提供可能となっています。またハイブリッド手術室は脳神経外科領域の血管内治療や、整形外科領域の外科治療、大量出血が危惧される産科領域の手術にも活用されています。もちろん現在でも開腹手術や開胸手術が必要な多くの難易度の高い手術は、各領域とも優れた技術と豊富な経験を持ったエキスパートの専門医が手術を統括して行いますので安心して治療を受けていただけます。

外科的治療のみならず、現在、様々な疾患に対して、ガイドラインに基づいて標準的な診療が提供されています。ガイドラインは臨床試験や臨床研究などの結果から得られた科学的根拠により提唱されたもの（evidence-based medicine：EBM）で多くの患者さんにとって理にかなっているといえるものです。一方、患者さんの年齢、基礎疾患や場合によっては社会的背景などから、あるいは比較的稀な疾患や病態などで、標準的な考え方のみで診療方針を決めることが難しいこともよく経験します。当院で治療を受けられる方の中には、高齢化社会の中で様々な持病を持たれている方も多くおられ、多くの診療科や多職種の医療スタッフが連携・協同してチーム医療を推進していくことが益々重要となっています。「患者さんと協働して、心のこもった、安全で質の高い医療を行います」という当院の基本理念に向け、地域医療機関の方々との連携のもとに、チーム医療を推進し、信頼され満足される高度で専門的な医療を行うよう努めてまいりますので、今後とも広島市民病院を宜しくお願い申し上げます。

より身近になったロボット支援手術の現況と展望

広島市立広島市民病院外科　上席主任部長
手術室運営委員会ロボット手術部会　部会長
井 谷 史 嗣

わたくしは1985年に岡山大学を卒業後、まず当院外科で研修医として2年間を過ごし、その後他の関連施設での研修、大学での研究などを経て2014年に再び当院外科で勤務することとなりました。その間、外科手術は開腹手術から腹腔鏡（胸腔鏡）下手術へ、さらにロボット支援手術へと大きな変貌を遂げており、研修医時代には全く想像もできなかった状況となっています。

当院では2012年からdaVinci（ダヴィンチ）Siという手術支援ロボットを導入し、いち早く保険診療が適応となった泌尿器科において、前立腺がんを中心にロボット支援手術が行われており、国内でも有数の実績をあげています。2018年からは、施設基準という制限はあるものの保険適応が拡大されるとともに、daVinci（ダヴィンチ）Xiというさらに進化し使いやすくなった機種を導入することで、泌尿器科（前立腺がん、腎がんなど）だけではなく、外科（食道がん、胃がん、直腸がん、膵がんなど）、呼吸器外科（肺がん、縦郭腫瘍）、婦人科（子宮体がんなど）において順調に導入が進んでいます。

ロボット支援手術というと何となく不安に思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、ロボットが勝手に手術をするのではなく、あくまで人間である外科系医師がロボットを操作して、より精巧な手術を行うものですのでご安心ください。手術支援ロボットは、図１にあるように患者さんに接する部分のロボットアームを備えたペイシェントカートと、術者が操作するサージャンコンソール、加えて電気メスやモニターからなるビジョンカートからなっています。術者は、通常の腹腔鏡（胸腔鏡）下手術と同じように、まず患者さんの腹部（胸部）にトロッカーという細い管を何本か挿入しロボットアームを取り付けます（図２）。その後にコンソールに移り、コンソールの画面を見ながら操作することによってロボットアームを自在に操作し、手術を行います。

ペイシェントカート　サージャンコンソール

図１．daVinci（ダヴィンチ）Xi

ロボット支援手術の利点は、まず術者が見る画面が3Dであり、より繊細な画面をぶれることなく自由に操作できることが挙げられ、カメラ助手のストレスも解消できると考えます。もう一つはロボットアームの自由度が高く、腹腔鏡（胸腔鏡）での鉗子操作では不十分となっていた狭い部分でも、手術操作が確実に行えることが挙げられ、さらに手振れ補正機能などもついており、より安全な操作が可能です。

図２．ロボットアームの装着

ロボット手術に関しては、術者と助手は決められたトレーニングを受けて初めて資格を得ることができ、それなりの施設基準もありますが、当院はほぼすべての分野で基準をクリアしており、保険診療が可能となっており、さらに疾患によっては教育施設にもなっています。

ロボット支援手術の手術件数は増加の一途をたどっており（図３）、1台で運用できる症例数としては国内でもトップクラスであります。今後は、術者の増加、新たな疾患への適応拡大の可能性もあり手術件数もさらに増加する見込みで、手術支援ロボットの２台目の導入の準備を進めているところです。ロボット支援手術においては腹腔鏡（胸腔鏡）下手術に比較して合併症が軽減されるなどのメリットも証明されつつあり、当院のみではなく国内、さらに世界的に見ても、今後は増えることはあっても減ることはないだろうと予想しています。10年後にはほとんどの腹腔鏡（胸腔鏡）手術はロボット支援で行われているかもしれません。

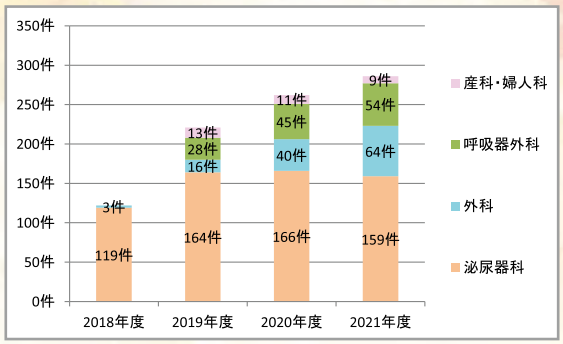

図３．ロボット支援手術年度別診療科別件数

当院は、ロボット支援手術のさらなる適応拡大、手術症例数増加に対応できるよう、また決して安全性が損なわれることが無いように努力を続けて行き、少しでも広島の医療に貢献したいと考えています。今後ともご理解、ご支援のほどよろしくお願いいたします。

遺伝子診療外来について　2022年春より開設

この度、特任病院長 塩崎滋弘先生をはじめとする院内関係部署の皆様のご尽力により、遺伝子診療外来が開設されました。2022年３月より外来診療を開始しています。岡山大学臨床遺伝子医療学教室・臨床遺伝子診療科（元職含む）から臨床遺伝専門医３名（平沢晃、山本英喜、河内麻里子）と認定遺伝カウンセラー®１名（二川摩周）が交代で参りまして、遺伝子診療外来（金曜日午後）を担当させていただいております。広島市民病院は2018年に、がんゲノム医療連携病院の指定を受け、がんゲノム医療でも多くの実践を重ねております。がん遺伝子パネル検査が保険収載された2019年からは二川・認定遺伝カウンセラー®が、遺伝性乳癌卵巣癌症候群対応が必要な患者様や血縁者対応などで乳腺外科外来（金曜日午前）への支援に定期的に来ています。

遺伝情報をもとにした臓器横断的治療薬の医療への応用例としては、がん診療では、マイクロサテライト不安定性（MSI）が High と検出された固形がん患者への免疫チェックポイント阻害薬の適応や、*BRCA1/2*病的バリアント陽性乳癌・前立腺癌・膵癌あるいは様々な治療過程の卵巣癌患者への PARP 阻害薬の適応などがあります。薬剤適応判断目的に実施した遺伝子関連検査の結果では一定割合で、遺伝性腫瘍や腫瘍易罹患性症候群などの素因を背景とするものが検出されます。直接、遺伝性腫瘍の診断となるケースもあります。各専門診療科の先生方におかれましては、日常診療の中で遭遇される遺伝性素因への対応や血縁者対応など、家族歴の聴取も含めて是非とも遺伝子診療外来へのコンサルテーションをご利用いただければと存じます。

遺伝子診療の目的は、各種治療の最適化、予後予測、発症予防への活用に集約されます。対象疾患は、すべての臓器の疾患になります。これからの全ゲノム解析の時代を見据えますと、がん領域のみならず、これまで各診療科の先生方のご尽力で対応されておりました小児・周産期領域の遺伝性疾患や、難病領域を含めて境界領域なく、かつ、あらゆる年齢層の方々を対象とする体制の構築が求められています。遺伝外来には、疾患に罹患されている方はもちろん、その血縁者の方々や遺伝に関してご心配やご質問のある方など、どなたでも来談いただけます。遺伝性疾患の診断に必要な遺伝学的検査については、病理診断科・臨床検査部の先生方や事務部門の皆様のご尽力で、幅広く検査を取り揃えていただいております。金曜日午後の遺伝子診療外来は、外来診療棟２階の内科・外科８診で行なっております。ご希望の先生には陪席いただいたり主治医の先生のご参画をいただけるような外来を目指せればと考えております。遺伝子診療科を末長くご活用いただきたく何卒ご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

遺伝子診療科　遺伝外来担当者

塩崎　滋弘（特任病院長）
平沢　　晃（臨床遺伝専門医・指導医・岡山大学臨床遺伝子医療学教授）
山本　英喜（臨床遺伝専門医・岡山大学臨床遺伝子医療学）
河内麻里子（臨床遺伝専門医・国立病院機構四国がんセンター乳腺外科）
二川　摩周（認定遺伝カウンセラー®・岡山大学病院臨床遺伝子診療科）
松永由香里（看護部）

平沢　　晃
臨床遺伝専門医・指導医
岡山大学臨床遺伝子医療学教授

河内麻里子
臨床遺伝専門医
国立病院機構四国がんセンター乳腺外科

山本　英喜
臨床遺伝専門医
岡山大学臨床遺伝子医療学

二川　摩周
認定遺伝カウンセラー®
岡山大学病院臨床遺伝子診療科

基本理念

患者さんと協働して、心のこもった、安全で質の高い医療を行います。

～基本理念実現のための3つの柱～

1. チーム医療を推進し、信頼され満足される医療を行います。
2. 地域医療機関との連携のもとに、救急医療と高度で専門的な医療を行います。
3. 健全な病院経営を行うとともに、すぐれた医療人の育成に努めます。

患者さんの権利に関する宣言とお願い

広島市立広島市民病院は、信頼され満足される医療を提供するため、次のような患者さんの権利を尊重します。

1. あなたには、個人として尊重される権利があります。
2. あなたには、良質で適切な医療を平等に受ける権利があります。
3. あなたには、診療に関して十分な説明と情報提供を受ける権利があります。
4. あなたには、自分自身の治療などについて、自分の意見を述べ、自ら決定する権利があります。
5. あなたには、当院での医療に関するプライバシーを保護される権利があります。

これらの権利を守り、より良い医療を実現するには、患者さんと医療提供者とが力を合わせて取り組むことが必要です。そのため、患者さんも積極的に医療に参加・協力する責任があることをご理解のうえ、ご協力くださるようお願いいたします。

外来診療のご案内

診療受付時間

午前8時30分～午前11時00分
※眼科／火曜日
　　午前10時00分まで
診療科によっては休診日がありますので事前にご確認ください。

休 診 日

土曜日・日曜日・祝祭日・8月6日
年末年始（12月29日～1月3日）

紹介状持参のお願い

初診時、他の医療機関からの紹介状をお持ちでない場合、保険診療費のほか医科7,700円、歯科5,500円（R４年10月から）のお支払いが必要となります。初診の際には、紹介状をお持ちください。